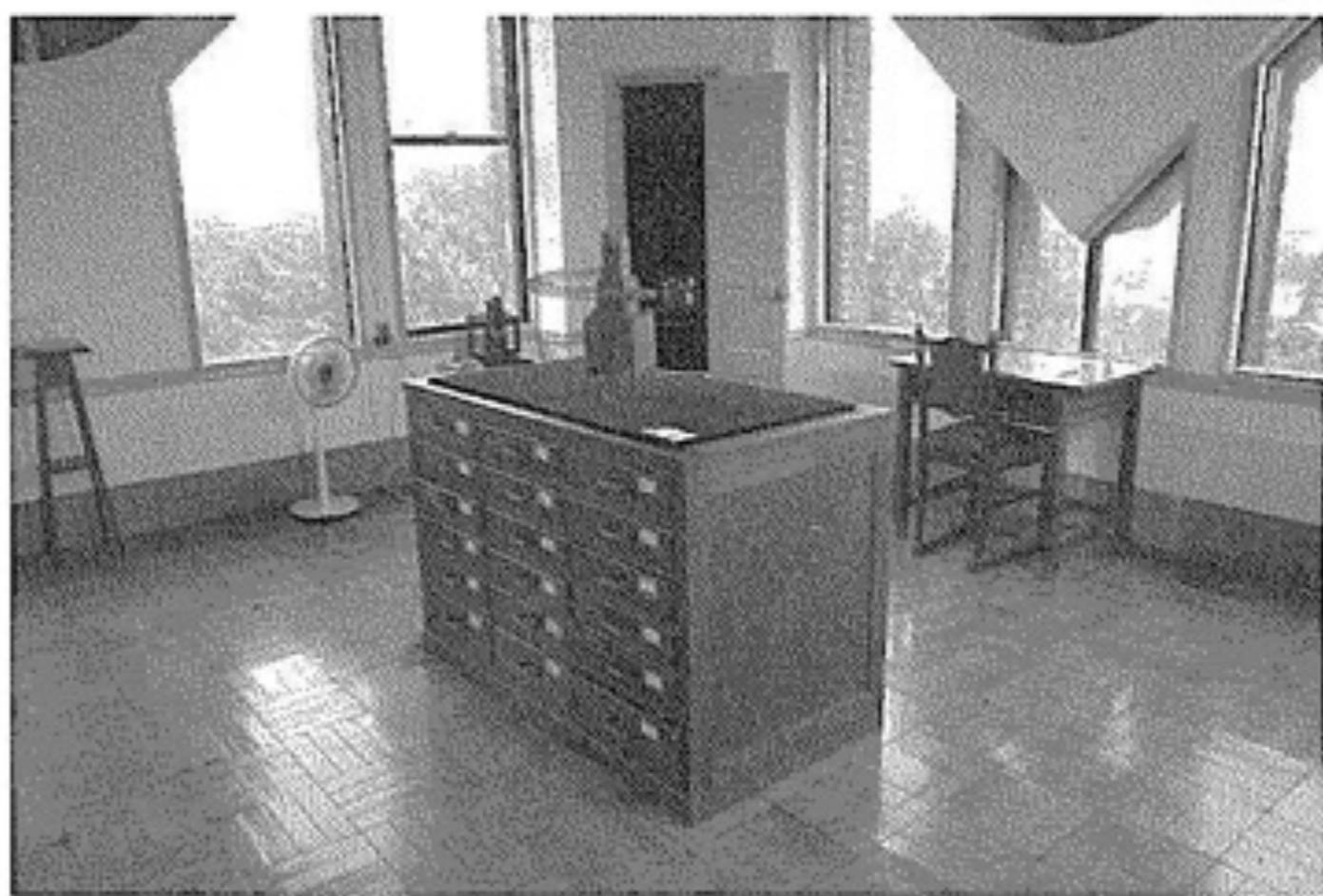


秘密の小部屋

「トポフィリ——夢想の空間」展をめぐって

田中 純

通学のたびに必ず眼にし
ているであろう一号館の時
計台。学生の皆さんはあの
塔に隠された小部屋の存在
を存じだろうか。時計台
の内部にある螺旋階段を昇
った先の、ちょうど時計の
裏側にあたる六階に、見晴
らしの良いその部屋はあ
る。螺旋階段の入口は通常
は閉ざされており、年に一
度の一般公開や特別な許可



会場写真。展示作品は、左から、高田安規子・政子《Ladder》(2007年)、内林武史《結晶製造器》(2002年)、《軌道終生》(2002年)、《幾つもの行き先》(2005年)。撮影：星野太。

筆者のゼミ「表象文化論実
験実習」の参加者たちであ
る。この授業では昨年から、
スイス人キュレーター、ハ
ラルト・ゼーマンによる展
覧会の研究を通じて、彼が
作り上げたような「思想史
としての展覧会」を自分た
ちで実践することを計画し
ていた。その実現がトポフ
ィリ展だったのである。

ある古くて大きな標本棚を
お借りでき、それを小部屋
に設置することが決まっ
た。それぞれの抽斗には、
制作グループ一人一人の
「場所への愛」を象徴する
ようなオブジェが作られて
しまい込まれた。螺旋階段
の壁には『空間の詩学』の
テキストが書き出され、小
部屋へと向かう上昇の運動
を演出していた。踊り場の
ほか、人目につきにくい隅
隅にまで、小さな制作物が
置かれ、音響による仕掛け

う懐かしいような響きを現
則的に立てて、来場者をま
るで催眠術にかけたかのよ
うに、物思いに誘っていた。
この展覧会は、時計台と
いう空間とこうした作品や
オブジェとの相互作用を通
じて、空間経験をめぐる『夢
想』への誘いを意図したも
のだったと言ってみよう。抽
斗のひとつに隠されたノ
トには、来場者が色鉛筆で
描いたそんな夢想の数々が
残されている。狭い会場の
ため、予約制の人数制限と
いう制約を設けたにもかか
わらず、会期十日間(七月
二十六日は休館)の間に、
入場者は合計五百五十人近
くに上った。リピーターも
複数いたことが、この空間
の魅力を証し立っているよ
うに思う。バシユールが
追究した「幸福な空間」を
めぐる思索が、そこで少し
でも具体的な空間経験とし
て体感されていたのだとす
れば、この展覧会の自論見
は達成されたことになる。

筆者自身にとっては、こ
の展示空間の与える全体的
な印象はとても脆く、はか
ない、繊細なものとして記
憶に留まっている。そのつ
かの間のはかなさこそがむ
しろ、幸福に似た何かを感
じさせていた。「展覧会」
としてはやや型破りな実験
ではあったが、実習という
授業の成果にとどまらない
広がりのある余韻や反響
を、制作した学生にも、ま
た、来場者の方々にも残し
えたのではないだろうか。

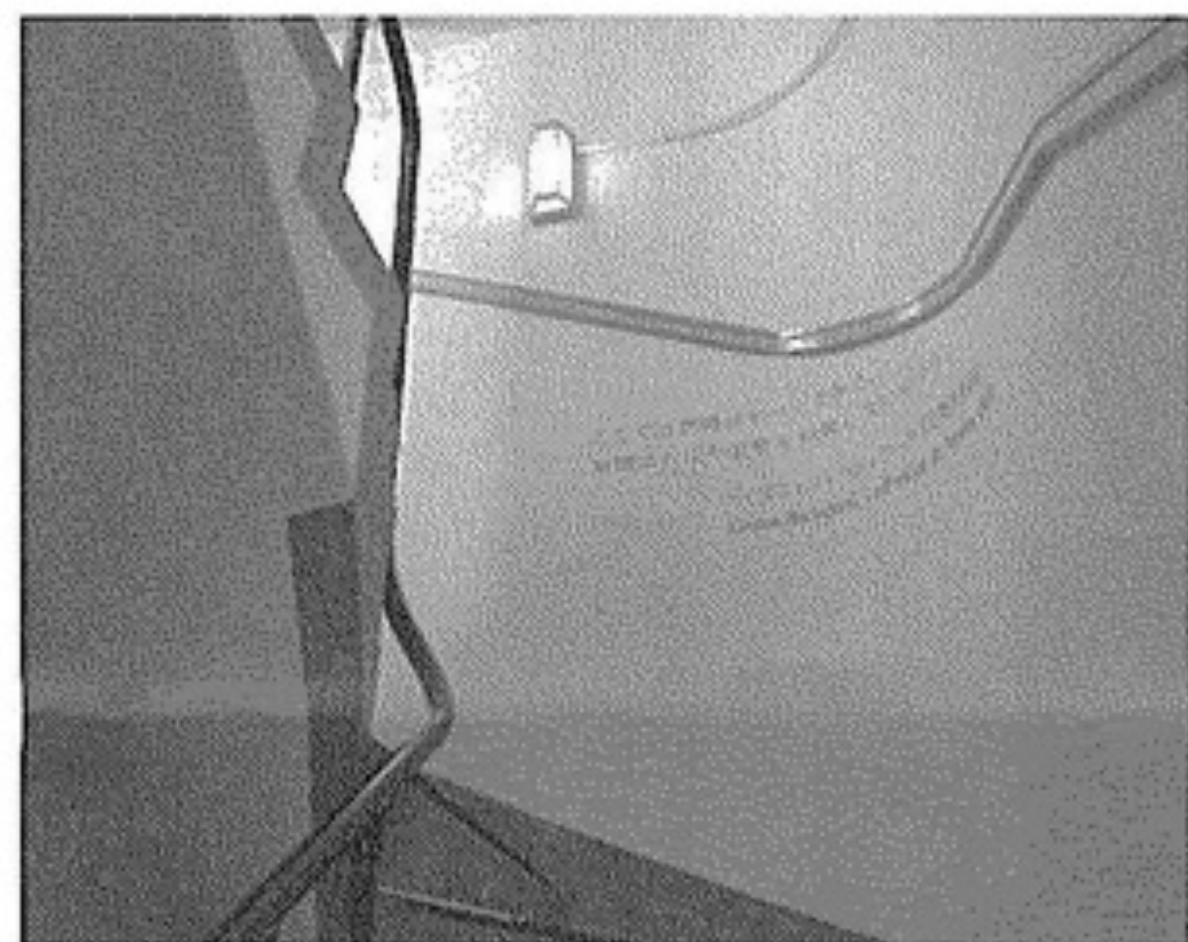
展覧会終了後には展示の
記録も兼ねたカタログが刊
行された。こちらにはバシ
ユール哲学の専門家の金
森修教授(本学教育学部)
や仏文学者・詩人の松浦寿
輝教授(教養学部)にも『空
間の詩学』をめぐるエッセ

がない限り、時計台内部に
立ち入ることはできない。
この秘密の空間を会場に
して、本年七月二〇日から
三〇日まで、「トポフィリ
——夢想の空間」と題する
展覧会が開催された。制作
にあたったのは総合文化研
究科・超域文化科学専攻
(表象文化論コース)の大
学院生十名(ちなみに全員
女性の「なでしこ」たち)。

「トポフィリ」という謎
めいた名は「場所への愛」
を意味する。この言葉はフ
ランスの哲学者ガストン・

バシユールによって書か
れた『空間の詩学』からと
られている。トポフィリ展
は空間をめぐるこの哲学者
の思索を展示空間として具
象化しようと試みたものだ
った。

この展覧会の趣旨に賛同
してくださった造形作家の
方々からは作品の提供を受
けた。内林武史、びん博士
(庄司太一)、高田安規子
・政子、谷本光隆の諸氏で
ある。びん博士提供の小柄
なガラス瓶が六階の窓際に
二本並び、展覧会期間中、
正門を通り抜けるわれわれ
を見下ろしていた。内林氏
の作品『軌道終生』の、繰
り返し軌道を転がり続け
る球体は、「コロコロとい



時計台内部の螺旋階段。撮影：星野太

イを寄稿していただいた。
このカタログはごく限定さ
れた範囲内での配付だった
ため、その内容をネット上
で公開する可能性を探って
いる。

このカタログに収められ
た「時計台」という場所の記
憶をめぐるテキストには、
戦時中に止まっていた時計
台の時計が再び動き出した
ことを伝える、一九五四年
の「教養学部報」第三十一
号の記事が引用されてい
る。そこには、夜、時計台
を何の気なしに見上げる
と、大きな月が出たような
錯覚を起す、とあった。
「まして月のある夜には、
二つ月が出たような気さえ
することがあります。」駒
場の虚空に浮かぶ、もうひ
つもの「月」——そんなル
ナティックな場所十日間
だけ実現した展覧会は、そ
れ自体、すでに幻だったか
のようなものである。このはかな
くも充実した催しにご協力
いただいた関係各位に、こ
の場をお借りして深く謝意
を表したい。
(超域文化ノドイン語)